

社会科学研究所 定例研究会 報告要旨

2007 年 2 月 14 日（水） 定例研究会報告

テーマ： 「バウハウスにおける反・反近代の意味－1933 年バウハウス解散とナチズム－」

報告者： 村上俊介（社研所員・経済）

日 時： 15:00～17:00

場 所： 社研生田会議室

報告内容概略：

1919 年から 1933 年まで、ワイマール共和国成立から崩壊と、全く軌を一にして「バウハウス」が開設され解散した。現在では、建築とその内部の家具・装飾デザインで近代様式を生み出す源泉として評価される。またそれ以外にも、教育機関としてのバウハウスが様々な特徴ある教育システムを開発し、その中で、芸術と工芸の統一を図ったことも評価されるし、さらにはバウハウス内における思想的には近代合理主義的な合目的性と、そうした合理性に合致しないエモーショナルな人間的情動性の併存に注目が向けられたりする。

今回の研究会では、報告者が 2006 年短期在外研究を機に、ハレ市を拠点に、バウハウスに関係の深いワイマール市、デッサウ市、ベルリン市を訪れて、それら諸都市での調査を踏まえたバウハウスの現代における意味が報告された。

報告は、まず第一に、1919 年バウハウスのワイマールにおける開校から、1925 年のデッサウへの移転、そして 1933 年のナチズムの圧力によるデッサウからベルリンへの移転と解散という、歴史を辿りながら、その過程でバウハウスが行った建築・工芸・芸術の教育の内容と変遷を詳解して、バウハウス像の概要が紹介された。第二に、ワイマールからデッサウへの移転、デッサウからベルリンへの移転という二つの局面で、ワイマールやデッサウでどのように政治状況が変化し、その政治状況の変化の中で、どのような批判がなされたのか論じられた。基本的には、ワイマールでのバウハウス批判は単なる素朴な保守派からの批判であるのに対し、デッサウで始まるナチズムからのバウハウス批判は、一筋縄でいかない、そして現代のバウハウスへの批判と共通するものがあることが指摘された。

問題は、なぜナチズムはバウハウスを批判し弾圧したのか、それに対してバウハウスの反・反近代運動は、どう対抗できたのかについて考察された。ナチズム権力掌握直後、バウハウスの主要人物達は、ナチズムと平和共存しようと様々に試みた。その点で、バウハウスの主要人物たちは、実際のバウハウスの運動の特徴である反・反近代的特徴を、十分に自覚化していなかったのではないかという問題提起で報告が終わった。今後の、研究の展開が望まれる。

記：専修大学経済学部・村上俊介